

地場産業としての伝統工芸

—エコロジー概念を用いて—

Traditional Crafts and Folk Industry

—From Natural, Social and Cultural Ecology —

丸谷 耕太
Kota MARUYA

土肥 真人
Masato DOHI

This paper aims to grasp the relationship between traditional crafts and their locality by analyzing craftsmen's situation and their consciousness and to think it from ecological view. The survey was carried out through interviews with 17 craftsmen who are engaged in authorized crafts in Tokyo. From this research, the following results were obtained.

1. Most of the materials and tools used in the past can not be purvey today. Craftsmen have device on these in realistic way. 2. On the other hand, the social relationship observed in the producing process is still well preserved. 3. Craftsmen also cherish the cultural values in their works as they have done. 4. This social and cultural relations which had been traditionally generated make craft survive lively even under the circumstance which was weaken the relation with nature through materials and tools.

Keywords: 伝統工芸、エコロジー、地場産業、職人、技、原材料

traditional crafts, ecology, folk industry, craftsman, skill, material

1. 研究の背景と目的

(1) 研究の背景と目的

私たちの先人は、長い時間の中で自分たちの風土に合った工芸品を作り出し、その活動に適した原材料や道具を選び出した。その工程や原材料、道具の一つ一つは使われるべき工芸品のためにあり、工芸品はその土地の人々の風土に根ざした生活と共にあった。

近年、伝統工芸に関して文化保存や文化保護が謳われており、また、地域振興策の一環として伝統工芸の保存運動が各地でおきている。この動向は、近代化の中で失われつつある伝統工芸に再び意味が見いだされていると捉えられる。かつての自然・社会・文化が一体となった風土としてのエコロジーが崩壊しつつある今、伝統工芸はどのような意味を求められているのだろうか。伝統工芸がその風土の中になくはない理由、現在の伝統工芸がその風土との繋がりを明らかにする意義はここにある。

そこで本研究では、かつては人により作られるもの全てが工芸品であったこと、工芸品・職人・技が一体となって土地とのつながりの上に存在し、そのつながりがなくなった工芸は失われることを仮説とし、①東京の伝統工芸に関する歴史、政策を把握し、②原料・道具・搬出先の歴史的变化を把握し、③工芸品・職人・技の風土とのつながりを明らかにし、④伝統工芸がその風土の中にある意味を考察し、仮説の検証を行うことを目的とする。

(2) 既存研究の整理

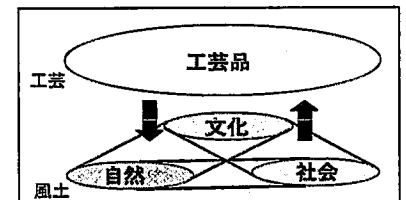
都市計画学の立場から伝統工芸をまちづくり、地域振興への利用の研究¹⁾、建築学の立場から、伝統工芸と住

居に関する研究²⁾、経済学の視点から、新しい伝統工芸の在り方を研究したもの³⁾、社会学からの立場で伝統工芸を考察した研究⁴⁾がある。しかし、地場産業としての風土とのつながりについて、実際に従事している職人を通じ、研究されているものは、管見では見られない。

(3) 伝統工芸とエコロジー

エコロジーは一般的に自然生態系を指すことが多いが、人間にとって自然とは独立して存在するものではなく、社会や文化と共に減少すると言う「風土」の生態系という考え方があ

る。風土とは、自然、文化、社会が一体のものとしての景相である⁵⁾。伝統工芸はこの風土の現象として存在している⁶⁾。本研究では、後者の立場、即ち風土(自然・文化・社会)の系としてエコロジー概念を用い、それと伝統工芸の関係を検証してゆく。(図—1)

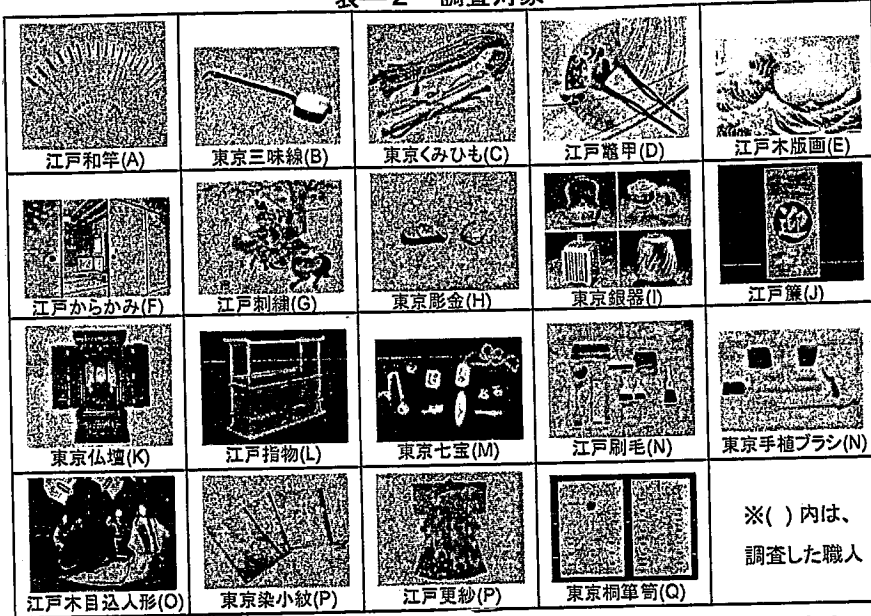


図—1 分析概念図

(4) 研究の方法と構成 (図—2)

第2章では、伝統工芸の概要を述べ、伝統工芸に関する歴史、制度を整理する。第3章では、東京都指定伝統工芸に従事する職人を対象にヒアリング調査を行い、原材料・道具・使い手の変化、及びそれらに対する意識を把握し、伝統工芸の残り方の実態を明らかにする。第4章では、第3章で行ったヒアリング調査に基づき、職人の実態と意識から、職人・技・工芸品の関係に注目し、

表—2 調査対象



※()内は、調査した職人

を調査し、同時にそれぞれの工芸の搬出先を調べた。また、この変化に対する職人の意識を明らかにする。具体的な調査項目を(表—3)に示す。

表—3 調査項目

①原材料に関する項目	②使い手との関係に関する項目
原材料の歴史的变化 実態	どこに品物を搬出しているか 実態
歴史的な原材料の魅力 意識	使い手の歴史的变化 実態
②道具に関する項目	展示に出す仕事と普段の仕事の違い 意識
道具の歴史的变化 実態	普段使いのものをつくる事の意味 意識
歴史的な道具の魅力 意識	

① 原材料と道具 (図—6)

(i) 原材料の変化

ほとんどの工芸は伝統的に江戸の外で原材料を調達し、現在も東京で産出されている原材料はほとんどない。これは、江戸が1600年以降に栄えた場所で、消費地だったために原材料が生産されなかったことに由来している。

変化があったものとしては、元々の産地が衰退してしまったもの(E,H,I,M,N)、環境保護のために入手できなくなったもの(A,B,K)、自然染料から化学染料に移行したもの(C,P)、そして、大量生産品を使用し始め

表—4 原材料の変化

工芸品(原材料)	変化の要因	対応の仕方
M 東京七宝(金属)	産地の衰退	海外からの輸入
H 東京彫金(金属)	産地の衰退	海外からの輸入
I 東京銀器(金属)	産地の衰退	海外からの輸入
N 東京手植ブラシ(獣毛)	産地の衰退	海外からの輸入
D 江戸刷毛(獣毛)	産地の衰退	海外からの輸入
A 江戸和竿(クジラの髯)	捕鯨の禁止	あるもので回す、グラスやカーボンの使用
D 江戸籠甲(タイマイ)	輸入の禁止	あるもので回す、養殖の実験
B 東京三味線(唐木)	輸入の禁止	あるもので回す
K 東京三味線(獣皮)	動物愛護、食文化の変化	海外からの輸入、代替品の模索
K 東京仏壇(唐木)	輸入の禁止	あるもので回す、他の木を使う
E 江戸木版画(山桜)	産地の衰退	全国から集める
C 東京くみひも(自然染料)	耐久性に欠ける	化学染料を用いる
P 東京染小紋	耐久性に欠ける	化学染料を用いる
P 江戸更紗(自然染料)	耐久性に欠ける	化学染料を用いる
A 江戸和竿(糸)	産地の産業の変化	大量生産品の使用
J 江戸簾(糸)	産地の産業の変化	大量生産品の使用

たもの(A,J)がある。(表—4)

(ii) 歴史的な原材料への意識

自然のもの、特に国産のものが質は良いと感じている職人は多い(B,E,F,I,K,L,N,O,Q)。歴史的な原材料は日本の文化や風土に適している(C,J,L)。自然のものには同じものが決まらず(A,D,M)。この質を活かす事が技であり(D,O)、これらを均一に仕上げることが技である。職人はこの自然の性質に魅力を感じている。

染色に関しては、歴史的な草木染めよりも化学染料の定着の良さが好まれている。作業も化学染料の方が難しく、職人技だと感じている職人もいる。

(iii) 道具の変化

伝統工芸に必要な道具は全て東京で作られている。道具を作る職人がなくなったもの(E,N,D)に関しては、同じ道具を代々使ったり、自分で作るなど工夫をしている。その産業に特化しない一般的な道具は、市販のものを使用している(D,H,I,G,M)。東京七宝はより質の良いものを作るために一部機械化した道具を使用している。着物の染色は川で水洗を行っていたが、環境対策の為、今では水槽で作業をしている。(表—5)

表—5 道具の変化

工芸品(元々の道具)	変化の要因	対応の仕方
E 江戸木版画(馬運)	作る職人の消滅	使う職人自らが製作する
N 東京手植ブラシ(台・櫛)	作る職人の消滅	代々同じ道具を受け継いでいる
N 江戸刷毛(台・櫛)	作る職人の消滅	代々同じ道具を受け継いでいる
D 江戸籠甲(トクサ)	利便性	一般に市販されている紙やすりを使用する
H 東京彫金(バーナー)	利便性	一般に市販されているものを使用する
I 東京銀器(バーナー)	利便性	一般に市販されているものを使用する
G 江戸刺繍(はさみ・針)	利便性	一般に市販されているものを使用する
M 東京七宝(炉)	利便性	炭ではなく機械化された炉を用いる
P 東京染小紋(自然の川)	環境問題	新しく水槽を製作している
P 江戸更紗(自然の川)	環境問題	新しく水槽を製作している

(iv) 歴史的な道具への意識

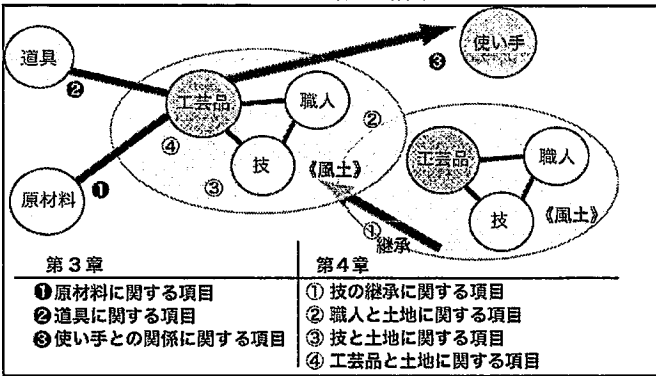
職人の各々の仕事に対して、道具が適しており(A,B,C,I)、歴史の壮大さを職人は感じている(A,C,E,F,G,I)。道具は一つ一つ質が異なる(L,P)ので、自分に合うよう工夫をしている(J,K,L)。良い道具によって良いものが作られる(C,E,I)。工芸品と道具は切り離せない関係にある。(表—6)

表—6 原材料・道具の変化

	道具: 変化あり	道具: 変化なし
原材料: 変化あり	江戸籠甲 東京彫金 東京染小紋 東京手植ブラシ	東京銀器 東京七宝 江戸更紗 江戸刷毛
原材料: 変化なし	江戸木版画 江戸刺繍	江戸和竿 東京三味線 江戸簾 東京くみひも 東京仏壇 江戸指物 江戸木目込人形 東京桐筆筒

《第1章 研究の背景と目的》 背景と目的	
《第2章 伝統工芸の変遷》 伝統工芸の変遷を把握する	
《第3章 伝統工芸の残り方—原材料・道具・使い手から—》 ヒアリング調査により伝統工芸の残り方の実態を明らかにする	《第4章 伝統工芸と風土のつながり》 職人の実態と意識から工芸と土地のつながりを把握する
《第5章 総合的考察》 伝統工芸の地域における存在意義を総合的に考察する	
《第6章 結論》 結論を述べる	

図—2 論文構成



図—3 工芸のダイアグラム

伝統工芸と風土とのつながりを明らかにする(図—3)。第5章で総合的に考察を行い、第6章で結論を述べる。

2. 伝統工芸の概要(図—4)

(1) 伝統工芸の歴史

東京の工芸の起源は江戸時代にある。幕府が開かれて人々が集まったことにより、職人が各地から集められた。彼らは江戸の武家や町人の生活を支えていた。江戸の生活道具は町人の好みが反映され、「粹」や「洒落」という江戸好みなものであった。19世紀に入ると日本の工芸は日本美術を代表するものとされ、海外へのアピールのために世界万国博覧会にも出品され、その結果、海外の注目を集めて多くの工芸品が輸出された。工芸品は芸術としての価値を高めると同時に、機械化によって大量生産され工業化していくものが増えた。産業の工業化が進むと手づくりの伝統工芸は衰退した。これに危機感を覚えた人たちが社会に対して伝統工芸の大切さを訴えた。その中でも代表的な人物は柳宗悦であり、彼は民芸運動を展開して世に大きな影響を与えた。民芸運動とは民衆の生活に則した手工である民衆的工芸の価値を復興させようという運動である。しかし、柳宗悦の民芸運動も工芸が本来持つ時代性や個人作家の立場が曖昧であり、批判の対象ともなっている。

(2) 伝統工芸に対する政策

江戸時代には奢侈禁止令が繰り返された。贅沢な装飾が禁じられ、工芸品も質素なものが多くなった。贅沢を禁止する風潮は、見た目が派手ではなく隠れたところに工夫を凝らす江戸の粋を育てる一因にもなったと言われている。

	江戸時代	明治・大正	昭和
制度	奢侈禁止令 肝煎(1699年)	顕彰制度(1890年~) 官展(1907-1958年)	伝産法(1974年~) 重要無形文化財(1954年~) 都:文化財保護法(1967年~) 国:文化財保護法(1967年~) 都:伝統工芸の指定(1982年~)
工芸	各地から職人が集まる 職人町 職人町の解体 運達・大衆化	工芸の大量生産・機械化	地域における活動(展覧会、実演、講演会) 工業の衰退
社会	江戸幕府開幕(1600年) 明暦の大火(1657年) 町人文化の発展	万国博覧会 工芸思想の隆起(民芸運動の展開)	文化保護思想 まちづくり

図—4 工芸と社会・制度の関係

江戸時代から伝統工芸に携わる職人の組織に対して政策的に、幕府がこれを統括してきた。江戸時代には「仲間」が組織、解体を繰り返し、明治以降は「協同組合」が形成されている。

19世紀以降の伝統工芸に対する政府の政策には、顕彰、無形文化財・文化財の保存技術の指定、伝統的工芸品の指定があり、特に文化保護に対する世論が強まる1950年以降は盛んになされている。政策は文化としての保護政策と、経済としての産業活性化政策に分けられる。現在は国だけではなく、都や区市町村の自治体でも独自に工芸に対する政策を行っている。国よりも都、都よりも区市町村がよりきめ細かい指定を行っている。

3. 伝統工芸の残り方—原材料・道具・使い手から—

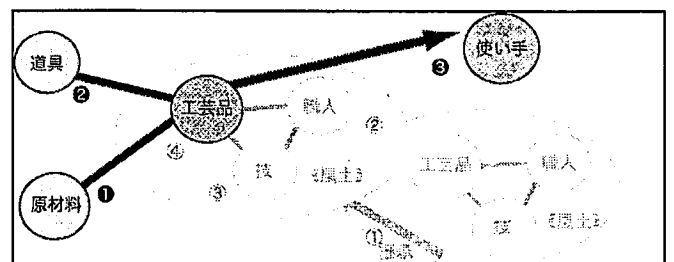
本章では、伝統工芸に用いる原材料・道具の入手先、工芸品の搬出先の過程の歴史的变化を明らかにする。また、それぞれに対する職人の意識を把握することによって、伝統工芸の実体面、意識面における残り方を明らかにすることを目的とする。

(1) 調査概要

調査概要を(表-1)に示す。ヒアリング調査の対象は東京都指定の伝統工芸40品目のうち了解がとれた職人は17人19品目である⁽¹⁾(表-2)。調査項目は原材料や道具と工芸品及び使い手との関係に関する項目と、職人・土地・工芸品と土地とのつながりに関する項目の2つに大別される。後者については第4章で扱う(図-5)。

(2) 伝統工芸の残り方と職人の意識

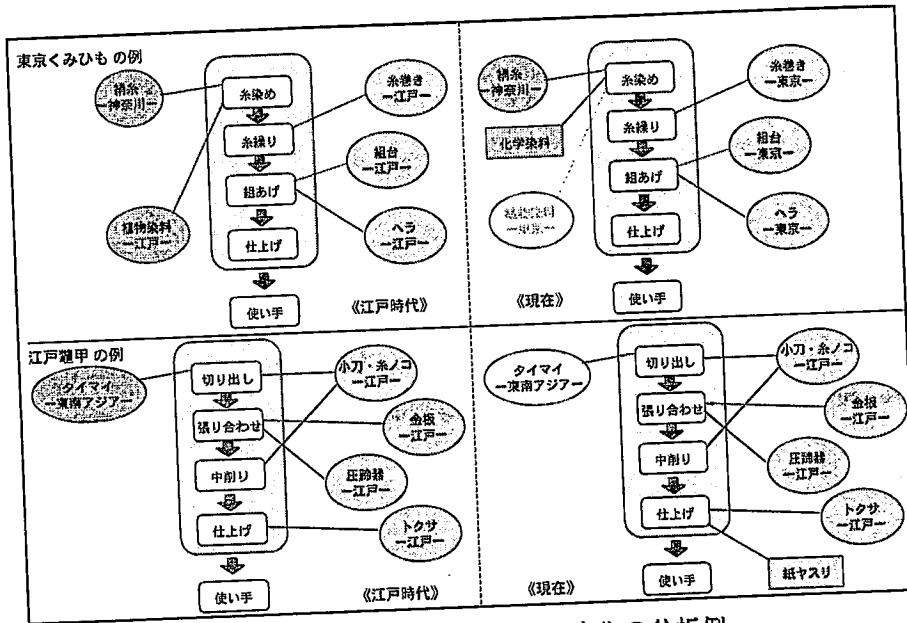
工芸品は多くの工程を経て生まれる。この工程に必要なとされる原材料と道具の現在における入手先とその変化



図—5 第3章調査ダイアグラム

表—1 調査概要

調査日時	2006年11月~2007年1月	調査方法	各工場におけるヒアリング調査
調査時間	1~3時間	調査対象	東京指定伝統工芸に従事する職人



図—6 工芸の原材料・道具の変化の分析例

いるが、普段の仕事を出す人(C,D,F,G,H,N,P)と工夫したものをを出す人(A,D, E,F,K,L,Q)がいる。しかし、展示会に対する職人の不満も多い(I,J,K,M,N,Q)。職人は顧客とのつながりを大事にしている。使い手や使い方が時代によって変わる工芸が多く、職人は需要に合うものを作っている(B,C,D,F,J,K,O,Q)。自分の作ったものを使ってもらえることが嬉しいと感じ(A,C,D,P)、また、使い手の幸せを願いながら仕事を行っている(F,K,O)。

4. 伝統工芸と風土のつながり

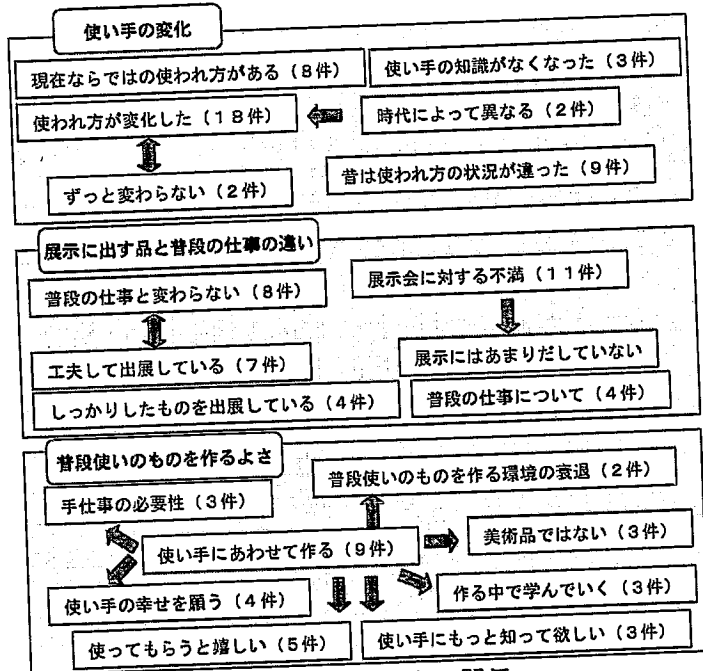
(図—8)

(v) 原材料と道具の変化のまとめ

原材料、道具の変化の有無によって、19品目の伝統工芸品が4パターンに分けられた。原材料も道具も変化していないものは19品目中4品目であり、それ以外のものは変化しながら現在に至っている。

② 使い手との関係 (図—7)

工芸品の搬出先は各産業によって様々である。近年では自治体やデパートの主催する展示会の機会が増えて



図—7 使い手との関係

表—7 調査項目

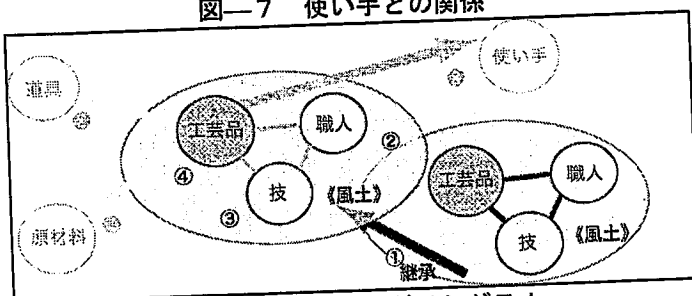
①職人と風土 (技の継承)		②技と風土	
1-1	どのように修業したか	実態	3-1 江戸、東京ならではの技
1-2	親方から学んだこと	意識	3-2 季節や天候による仕事の変化
1-3	受け継いだ技の上で自分が努力していること	意識	3-3 今の場で働くことの意味
③職人と風土 (職人の仕事)		④工芸品と風土	
2-1	今の場所で働き始めたきっかけ	実態	4-1 工芸品の起源
2-2	職人とそうでない人の違い	意識	4-2 江戸、東京ならではの型
2-3	仕事に専念できる環境	意識	4-3 歴史的な使われ方と今のそれ
			4-4 工芸品と土地のつながり

(i) 職人と風土

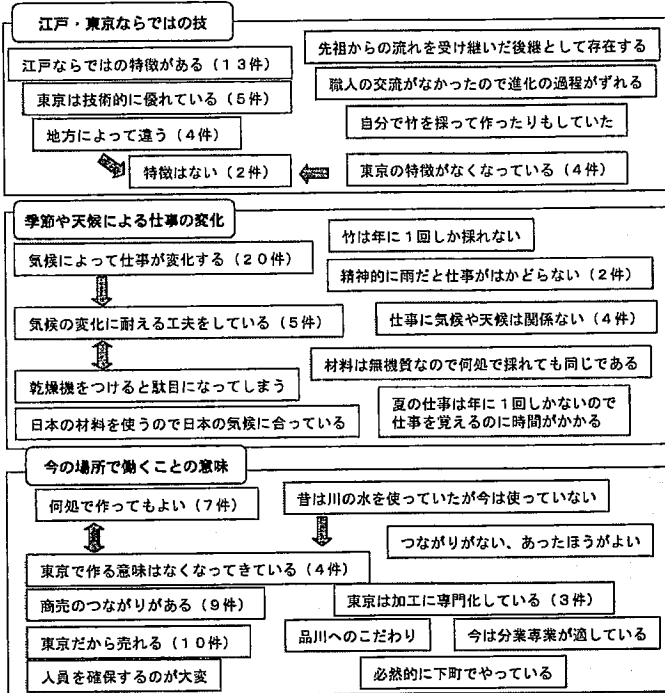
17人中16人の職人が世襲で技を受継いでおり、技は自分の親(12件)や周りの職人(5件)、あるいは学校等(2件)から学んでいる。職人それぞれが自分の技を大切に、それを伝承する中で職人としての心得も伝えている(13件)。特に、人としての生き方(4件)や人との付き合い方(3件)などが挙げられ、人間関係の中での職人の在り方が大事にされている。顧客との関係の中で仕事を学び、技を向上させている(8件)。また、古いものを作り続けるのではなく、新たな商品開発も行なわれている(5件)。より現代の生活を理解し、顧客に仕事をより理解してもらうためにも、顧客と職人のつながりは必要とされている。

(ii) 技と風土 (図—9)

東京の伝統工芸には東京ならではの技がある工芸が多く(13件)、それらは粋といった江戸の好みに育まれた(4件)。東京は大消費地で大きな需要があり(10件)、使い手によって伝統工芸の技が支えられている。東京の伝統工芸は全国的に見て優れた技を有している(5件)。しかし、職人がより良い技を取り入れることによって地方との差がなくなりつつある工芸もある(4件)。これ



図—8 第4章調査ダイアグラム



図—9 技と風土

は昨今の情報入手の簡易化が一つの要因となっている。多くの仕事は季節や天候に合わせてなければならない(20件)。これは自然の素材を原材料としているが故である。現在は冷暖房等の機械によって調節もある程度可能であり(4件)、場所性が薄れている事実がある。

(iii) 工芸品と風土 (図—10)

東京の伝統工芸品の起源は江戸時代にあり(17件)、工芸品の型も粋の文化などの江戸の好みに合わせて作られている(16件)。伝統工芸には歴史や伝統がある(3件)。しかし、ずっと同じものを作っているのではなくその時代々々に合わせて変化しながら現在に至っている(14件)。現在、東京としての特徴的な型がないものとして、東京彫金や東京銀器のように元々その名前が後代につけられたものと、地方との差がなくなって特徴を失いつつあり、同時に場所性も失いつつある東京三味線・江戸鼈甲・東京仏壇・東京彫金・東京七宝がある。

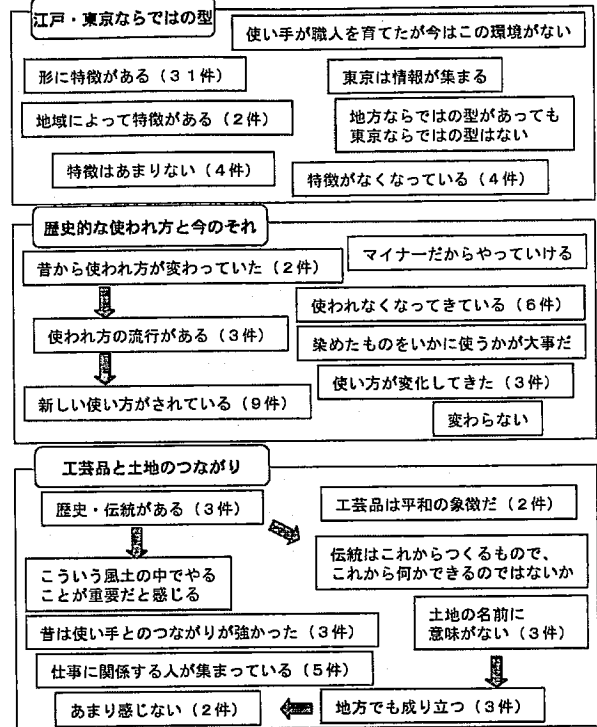
5. 総合的考察—伝統工芸と風土—

(1) 伝統工芸の実態と職人の意識

伝統工芸は歴史的に原材料、道具、使い方を大きく変化させている。これらの変化に対し、職人は、柔軟な意識を持ち、現実的に対応している。(第3章)

また、伝統工芸を構成する工芸品・職人・技が有する風土との関係は変化しているが、これらの変化にあっても職人は、従来の間人関係や技、江戸からの好みへの強いこだわりを意識している。(第4章)

以上から、東京における伝統工芸は、自然由来の原材料や道具が変化することによって、自然との関係が希薄化している。伝統工芸は、工芸と風土、または使い手との間の文化や社会との関係で残っていることが分かる。



図—10 工芸品と風土

(2) 仮説の検証

現在の伝統工芸は風土とのつながりにおける、自然・文化・社会、それぞれとのつながりを更に検証するために、第3,4章で行った職人へのヒアリング調査で、挙がった意見から自然・文化・社会の生態学的な各項目に関するものを抽出し、グルーピングして図解化した後に考察する。(図—11)

① 自然的側面から

伝統工芸は自然の原材料を主に用いている。「自然のものは1つ1つが異なる」(D,J) ために、「湿気によって仕事が変わる」(A,B,D,E,F,K,L,J,P) ために、「機械ではできない」(D,L) 「自然の特徴を活かす」(D,E,F,K,L) ものである。職人によっては「天候によって気分が変わり仕事に影響する」(G,J) こともある。職人は、「自然のものに魅力を感じる」(B,C,F,K,L,Q) とともに、自然の中で仕事を行っている。このように職人は自然の制約を受け、自然の中で仕事をしている。

② 文化的側面から

伝統工芸には「江戸の好み」(B,F,L,P) や「江戸ならではの型」(L,O,P) が存在する。洒落やはんやり、華奢や堅牢というように「工芸には粋がある」(A,C,E,H,I,L)。職人の仕事によって、これら文化が具現化される。それらを使う人たちは「東京のものとしてのイメージがある」(E,I,P) と感じられる。

③ 社会的側面から

職人は「日用品を作る」(D,E,Q) ために、工芸品を「お客のために」(E,F,H,L,M,P) 頼まれたものを作る」(I,N)。使い手の要望に応えることができ、「新しい二

ニーズに対応する」(C,D,E,G,J,K,L,M,P,Q) ことが可能になる。また、職人は「生きる為に仕事をしている」(E,F) ので、「働くことに集中することが必要」(D,E) であり、「収入が必要」(F,I,L) である。また、工芸品に必要な原材料や道具の仕入先は下町に揃っているため、「下町に職人が集まっている」(K)。そして、複雑な工程を分業で行うこともあり、職人の中で「仕事のつながりがある」(A,B,D,I,K,L)。

④ 自然・文化・社会を横断するもの

「日本人は木目が好き」(L) だと感じている職人もおり、文化に沿うような「自然の活かし方がある」(E)。職人の仕事の中には「季節ものの仕事」(C,M) があり、季節によって技も違って来る。これは、技の修得に時間を要する一因となっている。江戸時代の政策である「奢侈禁止令で江戸の好みになった」という影響も一つある。さらに伝統工芸には「江戸ならではの使い方」(B,D,N) や「伝統芸能・伝統行事との繋がり」(B,I,O) がある。

このように職人は伝統と産業の狭間で仕事をしており、だからこそ、「風土の中でやるのが重要」(J) であるという意見がある。それは「風土の中で育ったものは日本の風土に適している」(J) からである。

(3) 伝統工芸と風土のつながり

伝統工芸は、風土を構成する3側面のうち、自然との関係を弱めながらも、社会、文化との関係を維持することで今日でも存在している。従って、冒頭に挙げた仮説は、安定的とは言えないが、妥当であると言える。

現在の伝統工芸に対する政策は、文化・産業（社会）に特化している。（第2章）。いま、自然との関係を修復するような政策を実施すべきではないだろうか。自然を意識した政策によって、自然そのものを再び回復することができる。また、工芸は自然・文化・社会（＝風土）で成立するものであり、伝統工芸を通じて、社会・文化と一体となって成立する風土の中の自然を再度回復する必要性がある。

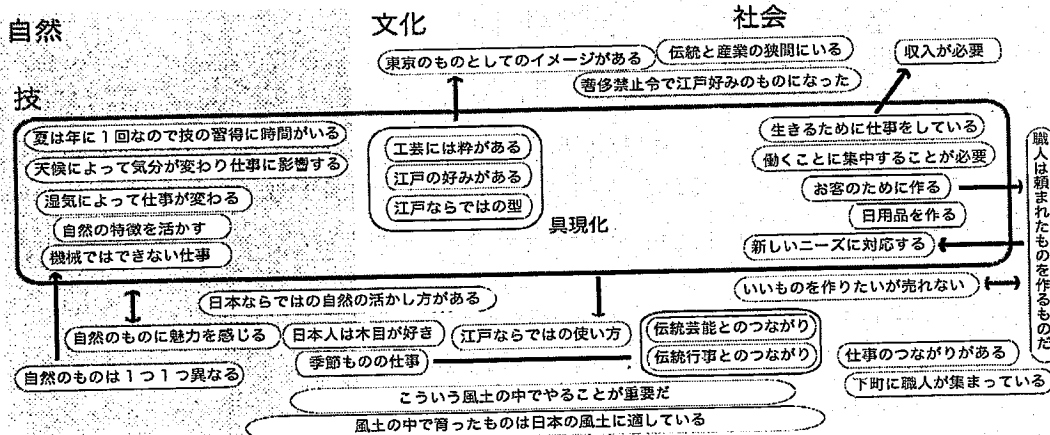
6. 結論

本研究により、以下の結論が得られた。

- 幕府が開かれて人々が集まり、江戸で工芸品が作られ始めた。生活道具は町人好みが反映され、粋や洒落という江戸好みのものであった。19世紀に入ると工芸は美術的価値を高め、工業化によって大量生産され始める。やがて工芸は衰退し現在に至るが、20世紀以降は、政府や自治体の文化保護政策が盛んになる。[第2章]
- 現在の伝統工芸に対する政策は、文化、産業（社会）の2つの側面からなされている。[第2章]
- 東京の伝統工芸は、外から入る原材料、東京で作られた道具を用いている。原材料も道具も変化のない工芸品は19品目中4品目であり、多くの工芸は時代の変化に対応しながら今日まで残り続けている。[第3章]
- 原材料・道具・使い方の変化に対し、職人は柔軟な意識を持ち現実的に対応している。[第3章]
- 伝統工芸を構成する工芸品・職人・技が有する風土との関係は変化しているが、職人は、従来の人間関係や技、江戸からの好みへの強いこだわりを意識している。[第4章]
- 伝統工芸には、自然由来の原材料や道具が変化しながらも、文化的・社会的な関係性により東京の伝統工芸として残っている。いま、自然との関係を意識した政策が必要である。[第5章]

参考・引用文献

- 1) 玉井明子、久隆浩 (1999) 「地場産業都市における観光活動設計とまちづくりに関する研究—愛知県常滑市栄町を事例として—」、都市計画学会論文集、第34号、p.355-360
- 2) 小森宗泰、野嶋慎二 (2006)、「伝統工芸産地における発信型店舗・事務所の成立過程とそのネットワーク組織に関する研究」、日本建築学会計画系論文集、第576号、p.117-122
- 3) 森文雄 (2001)、「伝統産業の新たな産地形成について—漆器産地の伝統的構造からの変革—」、日本消費経済学会年報、第23号
- 4) 羽田新 (1991)、「伝統工芸の産地特性と現代化—：焼き物の場合」、社会学論叢、第122号、p.207-221
- 5) オーギュスタン・ペルク(1886)「風土の日本・自然と文化の通態」、筑摩書房
- 6) 和辻哲郎 (1935)、「風土—人間学的考察」、P.170-204 岩波書店



補注

(1) NさんとPさんはそれぞれ2種類の工芸に従事している

図-11 伝統工芸と風土